

E地区への展開

長 濱 嘉 孝

2002年の夏、岡崎の山手地区と呼ばれる小高い丘に、褐色の大きな建物が完成した。これらの建物が岡崎統合バイオサイエンスセンターを中心とする自然科学研究機構に属する3つの研究所の集合体である。今はこの地域の呼び名をとり山手地区と呼ぶことになったが、もともとはE地区と呼ばれていた。このE地区は、愛知教育大学の跡地であり、女子寮と大きなグラウンド（岡崎運動場）があったところである。このグラウンドでは、毎年3研究所と管理局（岡崎事務センター）対抗のソフトボール大会などが行われていた。まだ、A、B地区にテニスコートがなかった頃にはウィンブルドンのセンターコート並みの芝生（雑草が茂った？）のテニスコートもあった。女子寮は「山手ロッジ」として改修され、創設当時は来訪者のための3研究所共通の唯一の宿泊施設として好評であった。その当時に共同研究のために岡崎を訪れた国内外の多くの研究者には「山手ロッジ」の名は今でも懐かしいようで、しばしば話題となる。

基礎生物学研究所（基生研）と生理学研究所（生理研）が創設されたのが1976年（昭和51年）の5月であるので、本年でちょうど30周年ということになる。分子科学研究所（分子研）はこの2つの研究所より一足早く一昨年30周年を祝った。創設当初から、3つの研究所と管理局を設置するためのスペースとして愛知教育大跡地のA、B、C、D、Eの5つの地区が準備された。明大寺地区は、緑橋と呼ばれる小さな橋を境にA地区とB地区に別れ、前者には基生研と生理研が、後者には分子研と管理局（現岡崎事務センター）が設置された。C（三島）地区は共同利用研究者宿泊施設とコンファレンスセンター、D（竜美）地区は職員宿舎がある。

岡崎キャンパスの中心であるA、B地区に最初に完成した建物は分子研実験棟であり、1976年のことである。創設当時、愛知教育大の旧図書館に同居していた基生研と生理研は、1979年に基生研実験研究棟の2/3が完成したのを機に、この新居に共に移転した。それ以後、建物の増築は順調に進み、生理研実験研究棟は1980年に、基生研実験研究棟の残りの1/3が1983年に、そしてA地区の最後の建物となった形質統御実験棟は1996年に完成した。したがって、A、B地区の主な建物の建築は1975年に始まり、ほぼ20年をかけて当初の計画通りに完成したことになる。一方で、創設当初には数人から出発した各々の研究所と管理局は、その頃までには明大寺A、B両地区をあわせて1000人を超える大所帯に膨れ上がっていた。また、3研究所ともに各種大型機器の導入や新しいセンターや施設の新設の計画がいくつもあった。しかし、明大寺A、B地区には、そのためのスペースはまったく残されていなかった。当然のことながら、岡崎キャンパスで唯一の残されたスペースであるE地区に注目が集まり、その有効利用について3研究所と管理局とによる本格的な検討がすでに始まっ

ていたのである。

実は、3 研究所がこの広大な土地を利用して、各々を拡張しようという計画は創設当時からあり、いろいろな計画が毎年概算要求としても文部省に提案された。基生研に関しても、創設当時から将来計画との関係で E 地区の利用計画がいろいろと検討されていた。その一つは、昭和 50 年代の後半から 60 年代のはじめにかけて計画された、「基礎生物学交流研究施設」である。この施設は、基礎生物学研究を推進するための国内、国外との飛躍的学术交流を促進させるための交流研究施設を設置し、これら諸領域に関する情報の収集、分析・促進、研究集会、高度の研究講習会（トレーニングコース）の開催、共同利用研究等の促進、連絡調整等の諸活動を積極的に推進させようとするものである。その中心的施設となる共同研究利用研究センターでは、電子顕微鏡室やバイオリソース、ファイトトン室等が計画され、特に電子顕微鏡室では極低温高分解能電子顕微鏡の開発が検討されるなど、いずれも施設利用共同研究に供することが計画されていた。本研究施設は、基生研が「国立大学共同利用機関」であることを強く意識し、その役割を明確に果たすための拠点として計画されたものであったが、残念ながらその要求は叶えられなかった。その後も、基生研でいくつかの E 地区利用計画が検討されている。例えば、平成に入って設置が認められた形質統御実験棟を E 地区に建設すべく概算要求されたこともあった。

結局、20 年以上にわたって 3 研究所それぞれが独自に提案した E 地区将来計画はいずれも実現には至らなかった。E 地区への展開がスムーズに進まなかったそもそもの理由は、愛知教育大学運動場跡地はあるものの、先ずはその土地を岡崎国立共同研究機構（岡機構）に所属替えるための手続きが必要であったのである。そのためには、将来を展望する、しっかりとした利用計画が必要で、前述したような、3 研究所がそれぞれ別々に拡張を図るという計画では説得力がなく、その視点からの抜本的な見直しが求められたのである。そこで浮上したのが、3 研究所が一致協力して、新しい分野の研究を推進するための研究センターを E 地区に展開しようとする計画であった。そのためにまず、3 研究所と管理局が、それぞれの将来計画を緊急に検討し直す必要があった。

基生研でもこの方針に沿ってそれまでに検討されてきた将来計画が見直され、集中的に議論された。その結果、環境と生物との関わり、また生物の多様性に関わる問題を細胞、分子レベルで解析する新しい研究領域が今後の基礎生物学の発展には不可欠であるとの結論に至った。そのための方策として、既存の制御機構研究系を改編して「分子環境生物学研究系」を新設し、生物の環境に対する適応や耐性などの高次な生物現象を遺伝子レベルで解析できる領域を立ち上げること、さらには、「生物多様性原理研究系」を新設して、生物の多様化と進化についての研究を推進すること、の 2 点が最優先事項として取り上げられることになった。同時にこれらの研究系での研究を効率的に推進するための「形質転換生物研究施設」、「アイソトープ実験センター」、「生物分光実験施設」などもあわせて新設するという計画であった。ここに、従来の解析生物学から統合生物学にわたる基礎生物学の完成を目指すための基生研の将来計画が整ったのである。

このようにして作成された 3 研究所の将来計画に基づき、1997 年には「岡崎国立共同研究機構（岡機構）将来構想」がまとめられた。この構想では、3 研究所間における共同研究推進の気運の盛り上

がりを背景にして、分子科学・生物学・生理学の融合による新たな「分子生命体科学」を推進するための E 地区利用構想が述べられている。また、その担い手として、3 研究所共通の付属研究施設、また全国の共同研究者の施設として「分子生命体科学共同研究推進センター（仮称）」の新設が提言されている。この施設は、3 研究所からの教官に加え他機関の研究者が、分子レベルから生命体までの「分子生命体科学」に関する共同研究を強力に推進するためのものである。先に検討した基生研の将来計画もこのなかに組入れられ、「分子環境生物学研究系」に加え、その支援施設としての「形質転換生物研究施設」と「アイソトープ実験センター」の新設が含まれた。こうして、「分子生命体科学共同研究推進センター（仮称）」を中軸として、3 研究所がそれぞれの境界領域に関して有機的に連携して、分子生命体科学の研究を推進するとする充実した E 地区利用計画が、1999 年度の岡機構の概算要求として文部省に提出されたのである。この概算要求は、3 研究所が一体となり連携して新しい研究領域を立ち上げる点が高く評価され、初年度として「生命環境科学研究センター」が基生研の一組織として認められた。これにより、3 研究所と管理局の意願であった E 地区利用計画が現実のものになったわけで、大きな前進であった。

この決定を受けて、E 地区プランは、中心となる推進センターの名称や研究組織、さらには各研究所からの支援研究部門などについて、3 研究所と管理局よりなる「分子生命体検討委員会」や「E 地区利用検討委員会」で熱っぽい議論が展開された。その結果、前年度に認められた基生研の生命環境科学研究センターを「統合バイオサイエンスセンター」に転換して、E 地区の中心的推進センターとする 70 数ページに及ぶ分厚い概算要求書が作成され、文科省に提出された。この間、それまでに異なる研究領域の研究者と共通の研究組織の立ち上げについて議論することが少なかった私にとっては、この間の 3 研究所を代表する委員間の意見交換（議論）は実に新鮮であり、またきわめて緊張感のあるものであった。10 年近くを経た今となっては、とても懐かしい思い出となっている。なお、当時の基生研所長は毛利秀雄先生であり、そのご苦勞とご尽力は並大抵のものでなかったことは想像に難くない。ここで改めて感謝する次第である。

この岡崎 3 研究所が結束して提出した概算要求は、2000 年末に認められることとなり、ここに E 地区の土地は愛知教育大学より岡崎国立共同研究機構に所属替えされることとなったのである。また、同センターの建物計画の補正予算も認められ、最初の建物（現山手 2 号館、東）の建築工事も直ちに着工することになった。こうしてスタートした「統合バイオサイエンスセンター」（後に法人化にともなって「岡崎統合バイオサイエンスセンター」と改称）での研究活動は、3 つの領域からなるが、そのうち基生研関連としては生命環境研究領域に「生命環境生物学研究部門」、時系列生命現象研究領域に「発生遺伝学研究部門」と「分子発生学研究部門」の研究室が含まれている。もう一つは、戦略的方法論研究領域であるが、これには基生研関係の研究部門は含まれていない。一方、基生研明大寺キャンパスからは、3 つの研究部門（現、統合神経生物学研究部門、性差生物学研究部門、理論生物学研究部門）と一部の支援共通施設が移転し、E 地区における基生研の研究協力体制は万全となった。2002 年から始まった建物の建築も順調に進み、2004 年春までには、山手 1-5 号館からなる実験研究棟の建設はすべて完了した。しかし、唯一残念なのは、当初から予定されていた、山手地区全体

の表玄関でもある「研究支援センター」の建設が諸般の事情で手付かずに残されており、関係者全員がその早期の完成を切に望んでいるところである。一方で、30年にわたって岡崎3研究所の共同利用研究を担ってきた「山手ロッジ」は老朽化が進み、この3月末をもって閉鎖されることになった。こうして、長いこと眠っていたE地区は、活気に満ちた学術研究の拠点として再び蘇った。そして、20数年にわたり岡崎キャンパスで延々と議論されてきた「E地区問題」も、その地に「岡崎統合バイオサイエンスセンター」を中心とする3研究所の融合を基盤とした研究拠点の形成をもって解決をみることとなったのである。その歩みは、それぞれの研究所やそこに所属する一人ひとりが、21世紀における分子科学、基礎生物学、生理学の目指す方向を真摯に模索した30年でもあった。また、同時にそれは、岡崎の3つの研究所が大学共同利用機関として果たすべく役割を明確化するための貴重な機会ともなったといえるであろう。大学共同利用機関は日本が創出した世界には他に例をみないユニークな研究組織である。創設以来30年を経た今日、明大寺地区と山手地区からなる岡崎キャンパスが、自然科学における学術研究の国内外の拠点としてなお一層発展することを切に願うものである。

